

波動の世界と臨死体験

斎藤忠資

この論文の目的は、臨死体験という非日常的現象を、宇宙生成の原理となっている波動性という視点から考察することである。

① 波動としての宇宙

現代科学によれば、宇宙の究極的な姿はエネルギー場の波動パターンである。素粒子はすべて振動するパターンから成立している（ディヴィス, 55）。宇宙のすべてのものは、エネルギー場の波動パターンが相互に作用し合い、階層的な共振パターンから作られた織物である。人間もこの相互作用し合った織物の中に含まれているのみではなく、我々自身も織物そのものである。人間の身体は、エネルギー場の多数の波動パターンが共振した所に具体化した波動体に他ならない（以上の点については、浜野, 62.65; ベントフ58~68.71.228）。エネルギー場の振動数の違いによって、万物の多様性と変化が生じる。物体の情報は電磁波等の振動によって伝達されるが、ある特定の周波数に同調してその情報だけをすべての生物は感覚器官（脳）によって受信する（浜野, 59~60）。こうしてすべての生物が自分に与えられた感覚器の能力に合わせて、自分の世界像を作り上げている。海の中の魚が、海が世界のすべてであると思っっているように、すべての生物が自分の知覚できる世界を世界のすべてだと思っっている。しかし人間が知覚できる周波数領域は宇宙全体の周波数帯域のほんの一部でしかない。人間には知覚できない周波数領域が宇宙全体には多く存在している。例えばプランク定数以下の超高周波数帯域（ 10^{-33} cm以下）は、科学がどんなに進歩しても、人間には絶対に知覚不可である。脳（物質）はこの地球の表面を生きていくために必要な物質界の情報しか受信しない。言い換えるならば、知覚能力が制約されているために、人間の方が自分で世界を限定し、自分をその通常の世界の中に閉じ込めてしまっているのである。

② 階層的ホロンとしての宇宙

振動しているエネルギーは、周波数帯域の低いレベルから高いレベルまで階層を構成している。周波数帯域の異なるレベルは、分離していて直接つながってはいない。どの周波数領域にも限界があり、周波数を変更しない限りそのバリアを乗り越えることは出来ない。ある振動数はそれに呼応しない別の振動数には干渉しないので、電磁波にみられるように、異なる振動数から構成された多くのレベルの領域が同じ空間に、同じ時間に共存できる。また電磁波にみられるように、異なる振動数帯域は互いに妨害しないで、相互に浸透できる（Wookhouse, 123; バーガー, 524~525; Jankovich, 43.48~50; Buhlman, 1996, 88~89）。一定の振動数を持つ場の中に異なる振動数の場が存在し、両者は階層を構成しているのである。このことは通常の物質界を超えた非物質界は、通常物質界から遠く離れた所に存在しているのではなく、この物質界と同じ空間に同じ時間を共存していることを意味している。しかしこの非物質界は、物質界のみを知覚できる我々の脳には知覚できない。A.ケストラーによれば、この宇宙に存在しているものは、より包括的なレベルでは部分を構成しているというホロン状態になっている。（例えば胃は人体の一部である。）K.ウィルバーは、宇宙はいくつものホロンが入れ子状態に重なり合っって階層を構成しているとし、それを holarchy（階層的ホロン）と呼んでいる。階層的ホロン説では、全体は部分の総和以上のものである

という原理に基づき、上のレベルは、下のレベルでは断片的でバラバラな部分を、統合した全体としてまとめあげる（ウィルバー、1998,34）。従って上のレベルは下のレベルに影響を及ぼすことができ、コントロールする力を持つ。例えば体全体としての意志が手足（体の部分）を動かすことはできるが、手足が直接体全体を動かすことはない（ウィルバー、1998.2章。階層的ホロンのこれらの原理は、M.カクによっても超弦理論の立場から提唱されている）。

③ 階層的ホロンとしての人間存在

人間存在は、物質の場（肉体）と意識の場という2つの場が、入れ子状態で共存し（場の中の間）、各々の場が異なる周波数帯域を構成しているものと思われる。物質より意識の方がより高い周波数レベルから成立しているため、地上で生きている間は、この2つの場は階層的ホロンとして不可分の状態で統合されているが、肉体から分離した時は、振動数を上昇させて、より高い周波数領域に変容しながら移行するのであろう。自己意識（「私」というエッセンス）が情報パターンだとすれば、古いパソコンのデータをフロッピーで取り出して、新しいパソコンに移し換えることができるように、自己意識という情報パターンだけを肉体から別の体に移すことは可能であろう。

この2つの異なる振動数帯域は、すべて同じ根源的なエネルギーから生成されているので、グレード（程度）の違いしかなく、本質上の違いはない。従って二元論ではなく、2つの場は互いに浸透し合っており、相互作用できる。肉体と意識が、例えば量子現象の粒子と波動の二面性のように、同じ実体の二つの面だとすると、どうして意識のみが肉体から分離して、高周波数領域に移行できるのが説明出来ないであろう。同じ事はH₂Oが氷と水と気体に変容するという相転移説についても言える。むしろアナロジーとしては、さなぎから蝶への変身という現象の方が近い（こちらの方は同じ物質界の現象であるが）。反対に二元論を唱えたと、どうして肉体と意識が相互に作用できるのかを説明するのが困難であろう。

④ 波動現象としての体外離脱

M.B.Woodhouseは、体外離脱した自己意識が空間性を保持している点に着目する（自己意識は地上の空間を連続的に移動し、例えば天井といった空間のある一点から地上の周囲の状況を知覚する〈1990,131〉）。

M.B.Woodhouseによれば、何次元であろうと、何らかの空間に位置（場所）を占めるものは局所化できる。局所化できるものはすべて、拡大された科学的パラダイムの範囲内に収まる。二元論は魂が空間を持たないので、肉体と隣り合った空間を占めることを認めることはできない。それに対してM.B.Woodhouseが唱えるエネルギー一元論は、肉体から離脱するものが非物質的であることも、肉体の素材が本質的に物質的であることも否定する。肉体は「エネルギー＝意識」が密度の濃い仕方で統合された場とされ、肉体を離脱するものは振動パターンにおける相違によって構成されるものであり、それは本質（原理）上の相違ではなく、グレード（程度）の差であると考えている。そして精神と肉体の違いは、原理上電磁スペクトル上のX線とラジオ波との相違や、質量とエネルギーの違い以上に大きいものではないとされる（1990,132.cf.1996,242）。

一定の振動密度を持った精神は、別の振動密度を持つ肉体と同一空間を占めるが、これは重力と電磁力が同じ空間に存在することができるのと本質的には同じ事である。もっとも心は、重力や電気的エネルギーの量が増すのみでなく、レベルアップしなくてはならないが（1991,134）。精神が肉体を統合されているように、レベルの異なる二つ振動密度を持つものが同一空間を占めることができるならば、各々のレベルが別の空間を占めることも可能

であり、これが体外離脱現象で起こっていることである（1990,134）。肉体（物質）はそのままで、意識のみが周波数を上昇させたのが体外離脱である。想像的な同一エネルギーの密度の違いによって、精神と肉体の相違が生じたが、本来同一のエネルギーから両者は生じたので、両者が相互に作用するのは当然と考えられる（階層的次元間の相互浸透）。もし肉体から離脱した自己意志（私）が、肉体より高い振動数パターンレベルに移行するのであれば、M.B.Woodhouseが主張しているように、肉体の死後も生き続けるような実体のようなものが（例えばアトラル体や霊体といった）、現在すでに客観的に存在している訳ではない。肉体から離脱して行くものは、経験として認識される「自己」を構成している様々の状態・性質の統合体であって、その背後に「私」というidentityを一つにまとめるような、さらに高次の自己というものが既に現在存在している訳ではない（1990,135）。

自己意識が、肉体と解離するプロセスを示す典型的な事例がある。最初はDr.Wiltse という人の臨死体験からの証言である。「・・・私はsoulとbodyの分離という興味深いプロセスをみた。Egoは水平に前後をロックされていた。横揺れ運動が止まると、足の裏に沿って足指の所で水平運動は始まり、かかとへ移った。無数の小さなコードがブツと切れるのを聞いた。そうすると私は足から頭へと引っ込んだ。私の自己全体が頭に集められた。私は今やすべて頭の中にいると思った。脳の膜をすべてのサイドで軽く中心に向かって圧縮しつつ、頭蓋骨の縫い目の間から私は出始める。膜の袋のぺっちゃんこになった端の様に出始める。色と形についてはクラゲのように私には見えた。私は頭から抜け出た時、パイプの灰皿にくっついた石鹸の泡のように上下から水平に浮遊した。私がついに身体から離脱し、床に軽く落ちるまで。床で私はゆっくりと立ち上がり、人間の完全な形姿へと広がった。私は半透明で、青みがかって、完全に裸のように見えた。」（Myers,213）

別の事例では、臨死体験の時A意識（自己と結合）と、B意識（肉体）が解し、A意識の方は「自己」であり、私の肉体の外にあるように思われ、B意識の方は解体していくと報告されている（Muldon&Carrington,73）。

中国のミニャコンカ峰で遭難した松田宏也は、あきらめようとする弱い私を、歩けと命令するもう一人の強い自分がいたという。この強い自分は姿はないが、疑いもなく目の前斜め上1cm位の所にいた。それは苦しい時自分を励ます時とは違い、自分とは別の完全に独立した意志を持った存在で、心の中にあるのではなく目の前にあったという（立花, 230～233）。

臨死体験の別の例では次の様に証言されている。「私の中に突然に二つの存在が現れたのです。一つは、どこか深い所に隠れていて、もう一つより重要なもの、もう一つは外にある、あまり意味のないものです。まるでその時、その二つを結びつけていたものが焼け溶けて、その二つが分解してしまった様でした。強い方が私にはっきりと明確に感じられ、一方弱い方が無意味なものになってしまったのです。そのより弱い方が私の体なのです。一数日前だったら、私の中にそれまでは私が知らなかった内面の私という存在を見つけたということ、私の理解では人間全体を構成していたものなのに、今では私には殆ど気にかからない存在になってしまったもう一つの私より勝っているということ、啞然としたことでしょう」（.ゴルボフスキー, 116～117）。

さとうももこは、帝王切開のために局部麻酔した時の状況を次のように記している。「意識は根本のピュアなエネルギーの波動で、自分は肉体とは別のエネルギーの波動であることを実感。肉体は意識の乗り物としてシステム化された機械で、脳はコンピューターシステム。意識はエネルギーで、意識が脳を使用している状態である。局部麻酔で、脳のコンピューターシステムが休止して意識だけになった」（103～109）。

臨死体験例では、自己意識が肉体から解離したという点では一致しているが、肉体から離脱後の自己意識が新しい体を持つのか持たないのか、体を持つ場合にはそれはアトラル体なのか霊体なのかサトル体なのかといった具体的な定義については一致していない。

これらの点からみて、永遠なる靈魂が先在していて、出生時に肉体と結合するという二元論は正しくない。肉体と統合されている自己意識が、死ぬ時に解離してより高い周波数帯域に移行し、新しい状態に変容するものと考えられる（創発的一元論）。このことは、高周波数帯域そのものまでも、既に存在しているのではなく、創発するということではない。離脱後の自己意識と相互作用してホログラフィックな世界が生成されるが、非物質的な光そのものは、恐らく場のようなものとして客観的に存在することは確かであろう。例えてみるならば、テレビ受像器（肉体）が壊れても、テレビの放送用電波（自己意識）は、周波数を高めて、今度はより高い周波数帯域と同調できれば、自己意識は新しい状態に変容しながら、新しい世界を生成するであろう。この周波数のシフトが死ぬ時に生じるものと思われる。

⑤ 高周波数領域への移行としての体外離脱

体外離脱現象は、低い周波数レベルの物質界の肉体の場との統合状態から、自己意識が離脱し、より高い周波数領域にシフトする出来事と考えている臨死体験者がいる（例えば Jankovich, 42 ; Goble, 31 ; Atwater, 182~183 ; Buhlman, 2001, 18）。

S.V.Jankovichは、振動数がシフトするということは、存在探求の原理を変えることを意味するので、4次元空間への移行が可能となるとみている（50）。

K.Ringも体外離脱は意識がより高い周波数の4次元空間にシフトする出来事であると解している（234.237）。

C.Jungは「脳は変換器で、心それ自体の持つ無限の張力ないし強度が知覚できる振動数、つまり身体の広がりにも変換される。体外離脱のように、身体の内面的知覚がきえる場合は、徐々に起こる心化（psychification）によるもの、つまり延長を犠牲にした強度の増加である」と主張している（44~95.可能性としては、高周波数領域は通常の間には知覚不可能なプランク定数以下の超高周波数領域であることが考えられる）。

体外離脱前後に、体験者は振動を感じている。例えば、ある人は体外離脱前に肉体が振動し、自己意識が振動しながら全身から脳へ上昇し、振動しながら脳から離脱するという（Moody, 1978, 16）。他の例では、体外離脱の前と後に振動を感じたと述べられている

(Gibson, 135~136)。別の体験者は、「死の振動が私をより深く引っ張った時、ブンブンという音がかん高い唸りになると共に、私の魂は私の肉体から分離した。」と言っている。

(Fenimore, 90. 体外離脱前後の振動については, Merrissey, 99~102 ; Buhlman, 2001, 29.147~148. 163~164 をみよ。)

体外離脱前後に様々な音を聞く人が多いが（例えば, Moody, 1976, 29 ; Buhlman, 2001, 163~164）、これは自己意識が振動数を上昇させるためと考えられよう。自己意識が、次第に振動数を高めながら、肉体から離脱するのであれば、逆に振動数を下降させれば、自己意識は再び肉体に戻って肉体と統合できるという現象も説明できよう。両者が統合されている時には、意識と肉体は相互に作用できるのに、体外離脱後、自己意識は地上の人間や物体を素通りし、タッチ不可能になるのは、振動数が上昇して、物体とはもはや電磁作用できないためと考えられる。また体外離脱直後、体験者は天井付近から地上の状況を見下ろす例が多いが、これは自己意識が次第に振動数を上昇させるプロセスの初めの段階なので、物体に近い振動数を持つために、天井を素通りできない可能性がある。振動数がさらに上昇すると、やがて自己意識は天井と屋根を素通りして上空へと上昇するものと思われる。

自己意識が肉体から離脱する時と、再び肉体に戻る時に一時失神状態になる例が多いが、これは自己意識がより高い周波数帯域へとシフトするために生じるという可能性がある（Goble, 70）。

⑥ 高周波数領域への移行としての臨死体験

すでに述べたように、意識は肉体と周波数は異なるものの統合されている。しかし肉体が崩壊すると、意識は振動数を上昇させながら、肉体から離脱する。自己意識（「私」というエッセンス）なしには、肉体と未知のエネルギー体とのidentityが保持されないであろう。自己意識が体外離脱する前後に、体験者は振動を感じるのはそのためである。こうして自己意識だけが振動数を次第に高めながら、より高い周波数領域に到達する。臨死体験者がかいたまみた太陽とは異なる光の世界は、このより高い周波数領域のことであろう。この光の世界では、自己意識は超意識となつて、この高周波数領域に即した周波数を備えた未知のエネルギー体へと変容するものと思われる。この未知のエネルギー体は、高周波数領域に即した情報処理能力を備えているので、肉体よりも高い知覚能力を持つと考えられる。体外離脱直後から、暗いトンネル状の通路を通過して、この光の世界に達するまでは、新しいエネルギー体を完成させるまでのプロセスであり、未知のエネルギー体に関する体験者の証言が一致していないのはそのためであろう。

臨死体験では体外離脱後、自己意識がトンネル状の通路を通過して、この物質界とは異なる光の世界へと変容しながら移行する。D.Goble (23) とI.ベントフ (Ring, 238) は、このトンネル現象を通常の意識から高周波数領域へのシフトが原因で生じると考えている。臨死体験の事例の中には「私は光り輝く格子に向かった（猛スピードで）。輝く線が交差する糸と結び目はとても冷たいエネルギーで振動していた。格子はバリヤの様に見えた。スピードがダウンして格子に入ると、輝きは目も眩むばかりに強烈になり、私を吸収し変容した。この格子は私を時空を形なきものへと移行するエネルギー変換装置の様だった。私は別の場所にいたのではない。なぜなら空間的次元が消えた別の状態になっていたからである。」

(Solow, 10.107~108) というように、エネルギーの振動数のシフトと、この時空を超えた領域への変容を示唆しているものがある(M.L.フォン・フランツは、これをブラックホールと解している〈203〉)。W.Buhlmanは、このトンネル現象を物質的次元を区別している非物質的エネルギー膜が一時的に開いた通路で、自己意識がワームホールを通過してより高い周波数次元である非物質的なパラレル宇宙に移行してしまうと、この通路は再び閉じられてしまうとみている(86~87)。このエネルギー膜は、周波数の異なる物質的次元と非物質的次元を区別するエネルギー緩衝装置である(1996, 98~100)。

D.Gobleによれば、光の世界はより高い振動数からなる高次元界であって、肉体の制約を超えた超意識は、この真の実在界に移行する(1993, 25.63; Near 3)。K.Ringは高周波数領域が、4次元空間の光の世界に他ならないとみている(239~240)。

S.V.Jankovichによれば、光の世界は万物を生成する振動を作り出す源であり、調和した振動の無限の充満である(44)。A.E.Yensenは、宇宙はMaster-Vibrationによって支配されていて、高い振動数帯域が光の世界(天国)であり、低い振動数帯域が地獄であるとみている(15~16.27~28)。自然界の光はそもそも波動であるが、臨死体験にみられる光も振動している(Weiss, 42; Grey, 45; 片桐, 76)。別の臨死体験者によれば、「光はエネルギーの源であり、この地上にはみられない愛に満たされていて、光の微笑粒子が輝きながら私の体を通るのが見えた。光は私の体を通りながら振動する時、その愛を受け入れるほど、光はより輝いた。私の魂を浄化するものとして愛を私に注いだ。」と述べている(Dougherty, 24)。

D.ブリンクリーによれば、光の世界は光のプリズムのようなエネルギー界であって、すべてのものが内側から光り輝き、大気を通じて脈動する力を感じることができたという(41~47)。また光の世界はすべて一定の振動速度から構成されており(225)、光の存在も一定の振動パターンを備えている(223~224)。他の臨死体験例では「暗い穴の向こうの壁を超えた所は、強烈なエネルギー源が光の中で振動している全く次元の違う世界出会った」

と証言されている（立花, 222）。

体外離脱した自己意識が振動数のパターンを備えていることは、多くの例で報告されている。例えば「帝王切開で出産の際、局部麻酔をした。意識と脳は別のものであり、意識は自己の根本の純粋なエネルギーの波動であって、宇宙空間を漂っているようであった」（さとう, 107）。さらには「体外離脱した私は、波動のようなものだった。実体がなく充電されている状態に近い。それは小さくて円形で、ハッキリした輪郭はなく、雲のようなものであるが、それは独自のケースに収まっているようだった」（Moody,48）等である。D.ブリנקリーは、未知のエネルギー体が振動数を高めることによって上昇し、スピードアップして、高周波数領域の光の世界に移行することを詳しく証言してる。例えば「私は上昇し始めた。私の体がスピードアップして振動し始めた時、私はブンブンという音を聞いた。あるレベルから次のレベルへと上昇した。飛行機が空を上昇するように」（Brinkley,25）、「エネルギー界を上昇するにつれて、振動数は高まる」（ブリנקリー,222）、「霊体は急速に振動し、上昇し段階をへて、光のプリズムのようなエネルギー界に入った。」（ブリנקリー,41）、「体験者自身が光の世界と同じ周波数に同調し、周りにあるものと一体となる」（ブリנקリー, 225）「光の世界では、下には私と同類の人達が私よりもずっと遅いスピードで揺らめいていた。私の振動が減っていくのは不愉快だった。上にいる人達は私よりも明るく、より多くの光を発していた。私の揺らめくスピードが加速され、耐えられない程のスピードになった」（ブリנקリー,19）等である。

光の世界は高周波数領域なので、すべてのものは振動している。A.E.Yensenは、光の世界では万物を振動によって生成しているMaster-Vibrationと、すべてのものが調和して、完全な音楽を作りだしていると述べている（17）。臨死体験者の中には、光の世界でこの世のものとは思えない天上の音楽を聞いている人がかなりいるが、これは光の世界が物質界よりも高い周波数領域であるためとみられる（例えばYensen16;ブリנקリー.225;立花,222; Gieseke等）。光の世界ではすべてのものが振動して音を出し、全体として調和した美しい音楽を生み出している（Jankovich, 41 ; Eadie, 80~81）。

すべてのものが振動しているので、体験者の新しいエネルギー体も振動数を合わせて共振して、一体化（同化・共存）できる。D.ブリנקリーは「私は周りにあるものすべてと同じ速度で振動し始めた。私はその環境の一部となり、すべてを経験した。と同時に、すべてのものが、私を経験していたのだ」（225）と記している。

物質界の七色が、光のスペクトル（振動数）によって生成されるように、光の世界の色も、物質でない光のより高い振動数の違いによって作り出されるので、この物質界の色よりもはるかにカラフルかつ鮮明で美しいと言われている（ブリנקリー,223~224; Storm,33 ; Eadie, 78~79 ; Goble , Near , 3）。

⑦ 地上の物体のタッチ不可と素通り

電磁波にみられるように、異なる振動数は互いに干渉しないので、異なる振動数帯域から構成されてる多くのレベルの世界は、同じ空間に同時に共存でき、互いに妨害しないで相互に浸透しあえる。従って電磁波は物体を通り抜けることができる。肉体を脱した自己意識は、肉体（物質）とは異なるエネルギーの振動数パターンと考えるならば、非物質体が地上の人間や物体を素通りしてしまい、タッチすることができないのは、同じ原理によるものと考えられる。

フェルミオン（物質を作るもと）は、所与の時間に一つのフェルミオンしか所与の状態を占めることしかできない（パウリの排他律）。従って、固体は他の固体を通り抜けることはできない。フェルミオン以外のものから構成されているものなら、この物質界の固体を素通りできる。A.ズイーによれば、光子と重力子は、電荷=0で電氣的に中性なので、物体の電

磁バリヤを通り抜けることができる。ニュートリノは中性で電荷はないので、電磁バリヤを通り抜けることができるが、互いに弱い力でしか相互作用をしないので、ニュートリノで構造を作ることにはできない。固体を作っている原子の原子核は格子状につながっていて、光の中を電子が群がっている。固体内の空間は、電磁場でぎっしり詰まっている。電磁場と相互作用するいかなる粒子も壁を通り抜けることはできない。電荷が0か、十分なエネルギーを持った粒子は壁に穴をあけて通り抜ける。壁を通り抜けるためには、それは電磁氣的相互作用をしてはならない。壁の中の原子の原子粒によって強い力を受けてしまうので、壁を通り抜けるためには、強い力とも相互作用してはならない(252)。電磁相互作用しないものを、人は見ることはできない。肉眼で見るためには、光子と相互作用しなければならず、これは電磁相互作用するということからである。お互いに、強く相互作用して、原子のように結合し、日常的な大きさの構造を作り、しかも電子や陽子のような通常の物質とは非常に弱くしか相互作用せず、従って検出器で捉えることができない、その様な新種の粒子から未知のエネルギー体ができているということは全く可能で、その未知のエネルギー体は、壁を通り抜けることができる。しかしその未知のエネルギー体は通常の粒子とは殆ど相互作用しないので、通常の物体を動かすことができず、我々に話し掛けることもできない(258~259)。体外離脱後の未知のエネルギー体は、人体や地上の物体(建物、壁等)をタッチできず、すべて素通りしてしまうと報告されている(物体を素通りする例としては、Morrissey,23~26;Eadie,34;Green,31.113;Ritchie,15等。人体を素通りした例としては、Moody, 1976,45;1978,16;1988,171;Morse, 109;Myers, 214;Weiss, 64等。人体をタッチできない例としては、Moody, 1976,44; 1988, 7~8; セイボム, 52~53; Morissey, 25等、物体をタッチできない例としては、Morrissey, 23~24; Green, 69; Morse, 66; Ritchie, 15等を参照)。

⑧ 結論

- 1) 宇宙のすべてのものは波動から作られて、階層的ホロンを構成している。
- 2) 人間は肉体と意識という異なる振動数の場の統合体であり、階層的ホロン構造をなしている。
- 3) 臨死体験は、自己意識のみが振動数を高めながら、肉体から離脱し(体外離脱)、物質界よりも高い周波数領域へと変容しつつ移行する出来事である。
- 4) この移行プロセスとして、体外離脱やトンネル状の通路の通過といった現象が生じる。
- 5) 未知のエネルギー体は振動数が違うので、物質界の人間物体をすべてタッチできず、素通りしてしまう。
- 6) 高周波数領域は光の世界であり、そこでは天上の音楽が聞こえ、物質界よりも色もより美しく、共振してすべてのものと一体化できる。
- 7) 未知のエネルギー体は、初めから客観的な実在として共存する形で人間存在を構成しているのではなく、振動数を上昇することによって新たに創発される。従って物質界の人間と未知のエネルギー体との違いは、グレードの違いでしかなく、本質的な違いはない。従って二元論や魂の先在説は支持できない。

引用文献

- Atwater, P.M.H.(1994) Beyond The Light, A Birch Lane Press Book
ベントフ, I.(1987) 超意識の物質学入門, 日本教文社
Buhlman, W.(1996) Adventures Beyond The Body, Harper San Francisco
// (2001)The Secret of The Body, Harper San Francisco
Brinkly, D.(1994) Saved By The Light, New York, Villard Books
ブリンクリー, D. (1994) 未来からの帰還, 同朋社出版
ディヴィス, P.C.W.(1988)宇宙を創る四つの力, 地人書館
Dougherty, N.(2001) Fast Lane To Heaven, Hampton Roads Publishing Company
Eadie, B.J. (1992) Embraced By The Light, Gold Leaf Press
Fenimore, A.(1995)Beyond The Darkness, New York, Bantam Books
フランツ, M.-L.フォン(1989) 夢と死, 人文書院
ガーバー, R.(2000) バイブレーションナル. メディシン, 日本教文社
Gibson, A. S. (1994) Journeys Beyond Life, Hozizon Publishers
Goble, D. (1993) Through The Tunnel, Palm Harber, S.O.U.L.Foundation
Goble, D. (1993) Near Death Experience, www. artnet. net/dgoble/nde.html
Gieseke, G. M.(1999) Where Is The Music ?Texas, Password Publications
Green, C.(1968) Out-of -the-Body-Experience, Institute of Psychophysical Reseach
ゴルボスキー, A.(1994) 異界, 新読書社
Grey, M.(1987) Return From Death, London, Arkana
浜野恵一(1993) インナー・ブレイン, 同文書院
Jankovich, S.V.(1990) Die Energetische Struktur Des Menschen, Drei Frichten Verlag
Jung, C.G.(1976) Letters, vol.2, Princeron University Press
カク. M. (1994) 超空間, 翔泳社
片桐すみ子編訳(1991) 輪廻体験, 人文書院
ケストラー, A. (1983) ホロン革命, 工作舎
Moody, R. A. (1976) Life After Life, New York, Bantam Books
// (1978) Reflections On Life After, New York, Bantam Books
// (1988) The Light Beyond, New York, Bantam books
Morrissey, D. (1997) You Can See The Light , Stillpoint Publishing
Morse, M.(1992) Transformed By The Light, New York, Villard Books
Muldoon, S. & Carrington, H. (1957) The Phenomena Of Astral Projection, Rider
Myers, F. W. H. (1961) Human Personlity And Its Survival Of Bodily Death , University Books
Ring, K. (1982) Life At Death, New York, Quill
Ritchie, G. G. (1991) My Life After Dying. Hampton Reads Publishing Co.
セイボム, M. (1986) あの世からの帰還, 日本教文社
さとうももこ(1995) そういうふうに行っている, 新潮社
Solow, V.(1974) I Died At 10.52, in Reader's Digest, vol.105
Storm, H.(2000) My Descent Into Death, London, Clairiew
立花隆(1994) 臨死体験 (下) , 文芸春秋
Weiss, J. E. (1972) The Vestible, Ashley Books
ヴィルバー, K. (1996) 万物の歴史, 春秋社
// (1998) 進化の構造①, 春秋社
Woodhouse, M.B.(1990) Beyond Dualism And Materialism, in G. Doore(ed.) What Survives ?
// Los Angeles, Jeremy P. Tarcher
// (1996) Paradigm Wars, Frog, Berkeley

Yenson, A. E. (1979) I Saw Heaven, 私家本

ズィー, A.(1992) アインシュタインのおもちゃ, TBSブリタニカ